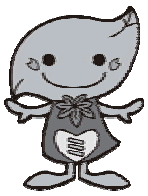
第27回 緑区 社会福祉大会

みんなで進めよう！
みどりのわ
・ささえ愛プラン
（緑区地域福祉保健計画・地域福祉活動計画）

「一人ひとりが主役
・共に支えあうまちづくり」


ミドリン（緑区キャラクター）

平成21年（2009年）２月６日（金）
【第２部】午後２時～４時

ほら、
よこはま は
あったかい

緑区社協シンボルマーク
＆キャッチコピー

内　容

みどりのわ
ささえ愛プラン

１　ささえ愛プラン取り組み事業の紹介

２　講演会「地域に新しい風をつくる～１０のヒント」

講師：特定非営利活動法人 市民セクターよこはま
事務局長　吉原明香　・　石井大一朗

地縁型組織とテーマ型組織の協働モデル事業ヒアリング調査から
見えてきた成果として、実際の現場の知恵と工夫から、
協働の押さえどころをお伝えします。

３　これからのささえ愛プランの推進に向けて

講　師　紹　介

よしはら　さやか
吉原　明香

略歴：1993 年～横浜市社会福祉協議会に入職、葛が谷地域ケアプラザにて高齢者デイサービスのスタッフ、
1995 年～2000 年市社協ボランティアセンターにて市民活動支援担当。
2002 年～NPO 法人市民セクターよこはま理事・事務局長。各区の地域調査に関り、自身も 2007 年自治会副会長を務めた経験から、地域活動支援の大切さに目覚めた。

いしい　だいいちろう
石井　大一朗

略歴：民間企業、建築まちづくり事務所勤務の後、大学院で「地域協働」「コミュニティケア」を学ぶ。現在、慶應義塾大学 SFC 研究所研究員、NPO 法人市民セクターよこはま理事・事務局職員。
市民セクターよこはまでは、市民活動共同オフィスの責任者として市民活動支援の現場に関わるとともに、各区の地域調査などに関わる。

特定非営利活動法人
市民セクターよこはま
shimin sector yokohama
http://www.shimin-sector.jp/index.html

『 特定非営利活動法人　市民セクターよこはま 』の
●● 目的 および 事業 ●●

「誰もが自分らしく暮らせるまち」を願い、自ら行動する個人・団体が連携・連帯し、相互支援を通じてより一層の地域活動の充実・発展をはかり、更に広い市民活動への支援、政策提言協働の実践を積み重ねつつ、一人ひとりの市民が主人公として幸せと豊かさを実感できる市民社会の実現に寄与することを目的とするとする団体です。

上記の目的を達成するために、次のような事業を行っています。

（1）連携とネットワークづくり（連絡会活動・認知症ケア事業等）
（2）人材養成研修事業（地域福祉コーディネーター養成研修等）
（3）市民活動支援（市民活動共同オフィスの管理運営・コミニティービジネス支援等）
（4）地域活動支援（地縁型組織とテーマ型組織の協働モデル事業・区と連携した調査事業）
（5）評価事業（福祉サービスの第三者評価事業・指定管理者第三者評価事業　等）
（6）上記の事業を通した行政や社会への提案・提言活動

●● 発行書籍 ●●

・困ったときのゲンバの知恵袋【訪問介護編】・市民による 食事サービス活動の可能性を考える
・ボランティアの知恵袋（横浜発）デイサービス・サロン編　（横浜市社協との共同発行）
・人がつながり地域が生きる　横浜市地域ケアプラザ地域活動交流事例集（横浜市健康福祉局との共同発行）他

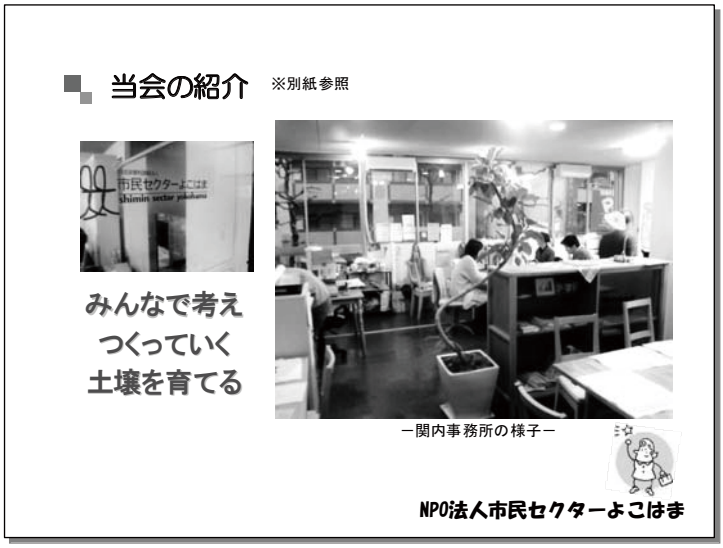
「地域に新しい風をつくる～10 のヒント」 講演録

（講師）
特定非営利活動法人 市民セクターよこはま
吉原 明香 氏 ・ 石井 大一朗 氏

地縁型組織とテーマ型組織の協働モデル事業
ヒアリング調査から見えてきた成果として、
実際の現場の知恵と工夫から
協同の押さえどころをお伝えします。

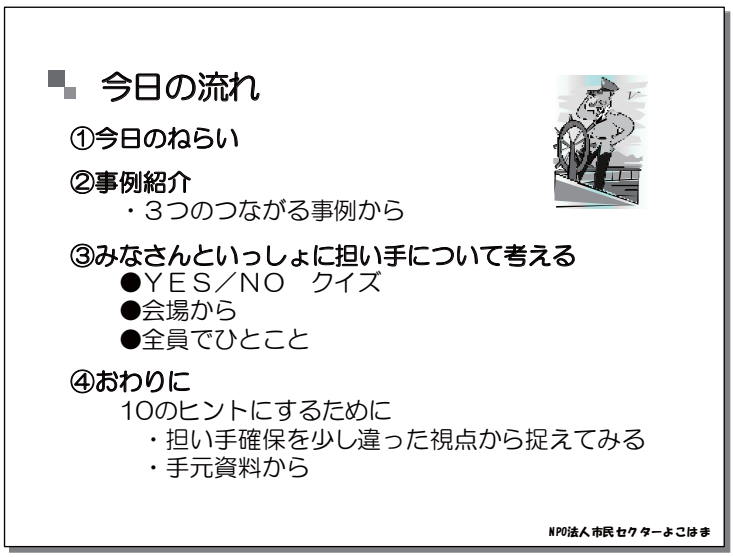
【スライド 1】

吉原：タイトルは、**「地域に新しい風をつくる～10 のヒント」‘つながる、楽しむ、続ける’活動を考える**、です。



【スライド 2】

吉原：はじめに私たち**ＮＰＯ法人「市民セクターよこはま」**について、紹介させていただきます。わたしたちの団体は今から約１０年前に横浜市社協のボランティアセンターで行われた勉強会がきっかけとなって生まれた団体で、在宅福祉グループが集まってできたのが「市民セクターよこはま」です。現在の介護保険制度ができる前、１９９８年ごろに、地域で活動している人が集まって、自分たち現場や当事者の人たちの声を政策につなげていくためにはどうしたらいいか、それでは一つの団体では難しい、ネットワークを組もうということでできた団体です。



【スライド ３】

石井：今日の流れですが、

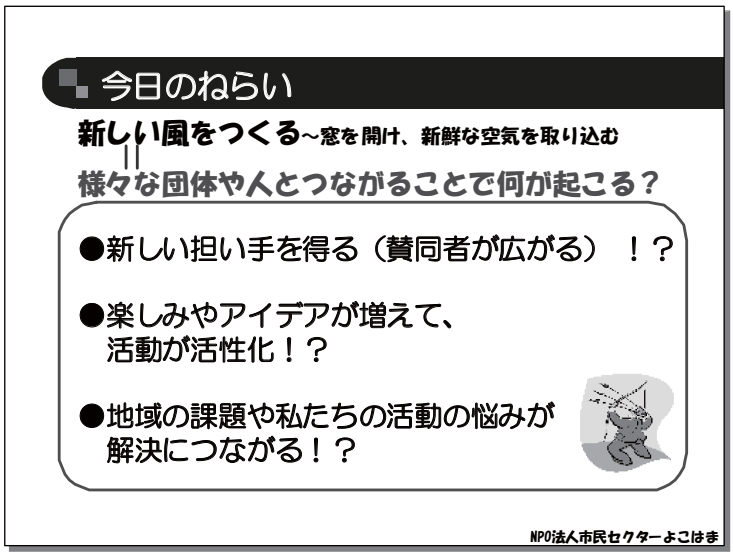
●最初に、「今日のねらい」を説明します。

●次に、「事例紹介」です。

共通のキーワード「つながり」ということを皆さんと一緒に考えていきたいと思います。つながることで何が起こるのでしょうか。資料を用意してきましたので見て行きたいと思います。

●その次に、本日ご来場の皆様と「担い手」について、クイズをやりながら考えたいと思っています。

●最後に、私たちから「１０のヒント」、「つながりをつくるヒント」、こんなことがあるのかなということを少し違った視点からご紹介させていただきます。



【スライド ４】

さて、「今日のねらい」です。

本日の講演のタイトルは、「地域に新しい風をつくる」です。「風が吹く」ではなく、「風をつくる」ということですので、勝手に吹くわけではなく、おそらく、皆さんのような方が地域の中で風をつくりだすのかな、ということです。

風は、例えば、家の中でこもっているだけでは、なかなか吹きません。「窓を開け放し、新鮮な空気を取り込むことで、家の中にも空気の循環を作り出そう」、「なんとか、窓を開け、新鮮な息吹を取り込もう」というわけです。では実際にはどういうことか。まず考えられることは、「新しい風」とは、「さまざまな団体や人とつながりを作って活動を元気にしよう」、ということです。今日、お越しの皆さまは、地域の中で随分、風を吹かしまくっているかと思いますが、実際、どのようなことか考えてみたいと思います。

「つながる」と良さそうなことを、まず３つ挙げてみました。

①　風が吹くと、「新しい担い手」、わたしたちの活動の賛同者が増えるのではないか。

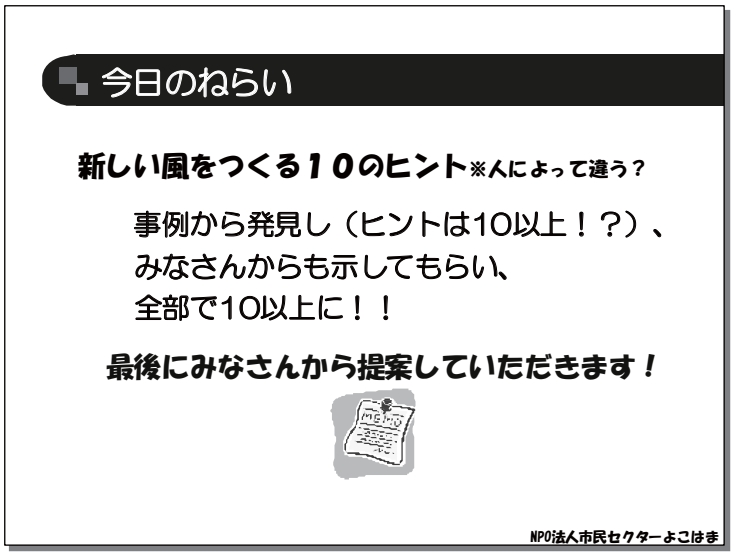
②　楽しみとかアイデアが増えて、活動そのものが活性化されるのではないか。

③　自分たちだけでは解決できなかったものが、「つながる」ことでいろいろなアイデアをもらい、解決につながるのではないか。

「新しい風が吹く」とこのようなことができるというように考えます。

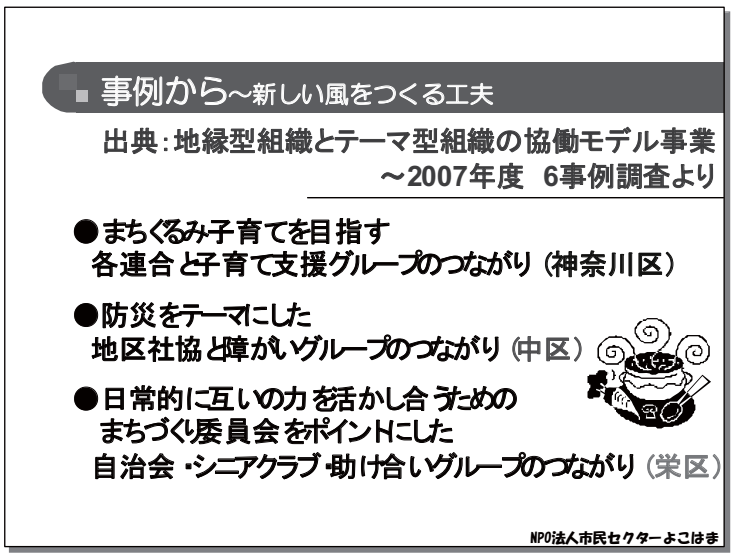
実際にはどうなのか。吉原が、昨年まで地元の自治会で役員をやっておりました。「新しい風」を吹かすことができたのか、聞いてみたいと思います。

吉原：私は 100 世帯の小さな自治会で役員を行わせていただきました。輪番制の班長になると共に全員が役員となり、全員１年で交替します。つまり、全員が「新しい風」なんですね。毎年、「新しい風」が吹きすぎて何も積みあがっていかない。せめて２年任期で半数交代制にしていきましょうと提案したのですが、役員をやり始めてみると連合自治会の会合や検討会などが毎月定例で行われ、私は仕事もある中で会合に駆けつけるのも大変でした。そしていざ行事となると、土曜日の準備から日曜日の本番、そしてまた忙しい月曜日が始まるというようにノンストップでひと月が過ぎていく。年が明ける頃には、もう１年頑張ろうよという気持ちがなえてしまいました。「新しい風」が吹いたんですが、また全員「新しい風」になってしまいました。ただ、この体験が私自身には貴重で、笑顔で挨拶し合える人が沢山増えました。また、いわゆる地域仲間、同期会というか 30 代、40 代の班長仲間が地域の頼れる仲間となりました。地域に知り合いが増えるということはこのようなことかと実感しました。



【スライド５】

石井：私も自治会に入っておりまして、しかも隣家が自治会長さんでした。そのことだけで安心感とか、その地域に住んでいる自信とかがわいてくる気がしました。自治会の方から頂いているパワーかなと考えています。しかし、一方で時間がない、時間を確保することが大変だということが共通していると思います。吉原さんもこれから５年、１０年と自治会の役員を務めることがあるかもしれません。そのような時に役に立つヒントを１０個、考えていきたいと思います。配布資料「地域に新しい風をつくる１０のヒント～地域仲間を増やす方法～」をご覧頂きますと、ヒントの８・９・１０は白抜きになっています。これらについて、これから皆さんと一緒に考えて行きたいと思います。また、配布資料には３つの事例を掲載しています。



【スライド６】

では、３つの事例から新しい風をつくる工夫を見てみたいと思います。

●まちぐるみ子育てを目指す

各連合と子育て支援グループのつながり

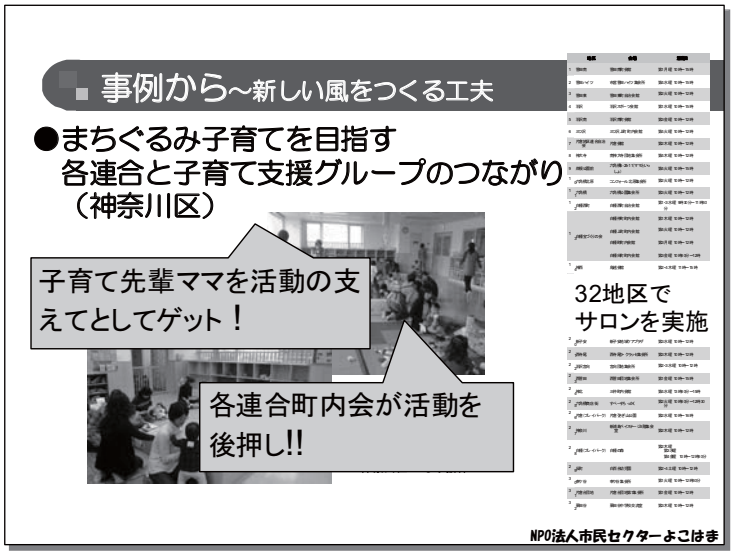
（神奈川区）

●防災をテーマにした地区社協と障がいグループのつながり（中区）

●日常的に互いの力を活かし合うための

まちづくり委員会をポイントにした自治会・シニアクラブ・助け合いグループのつながり（栄区）

いずれも一つの団体だけでなく、自治会やテーマ型の団体とか、複数の団体がつながりあっていろいろな課題を解決していこうという事例です。



【スライド７】

「神奈川区のまちぐるみ子育てを目指す連合町内会と子育て支援グループのつながりについて」です。

この事例は、市内でもちょっとした有名な取り組みのようです。現在は 30 以上もの子育てサロンがまちの中に展開しています。数もすごいのですが、そこに注目するのではなく、こちらの２点に注目したいと思います。

○　子育て先輩ママを活動の支えてとしてゲットしました！

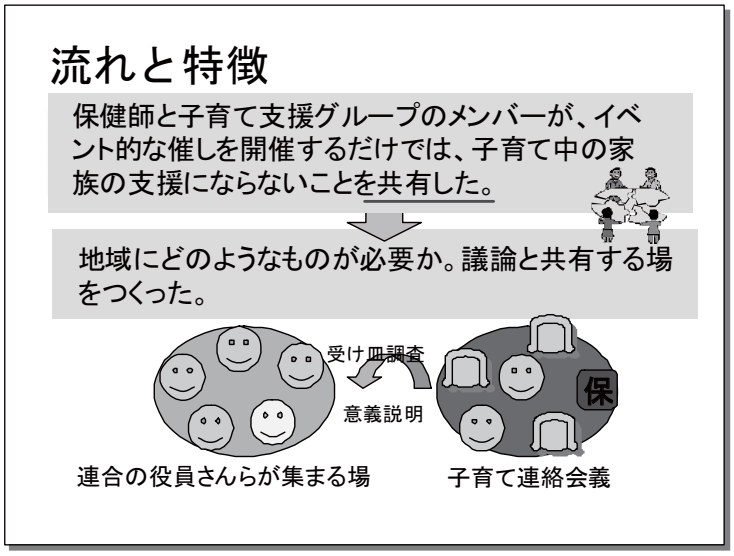
○　各連合町内会が活動を支援している！

【スライド８】

まず、流れですが、

◇保健師と子育て支援グループのメンバーとが、「イベント的な催しを開催するだけでは子育て中の家族の支援になかなかならない」ことを共有しました。

そして、

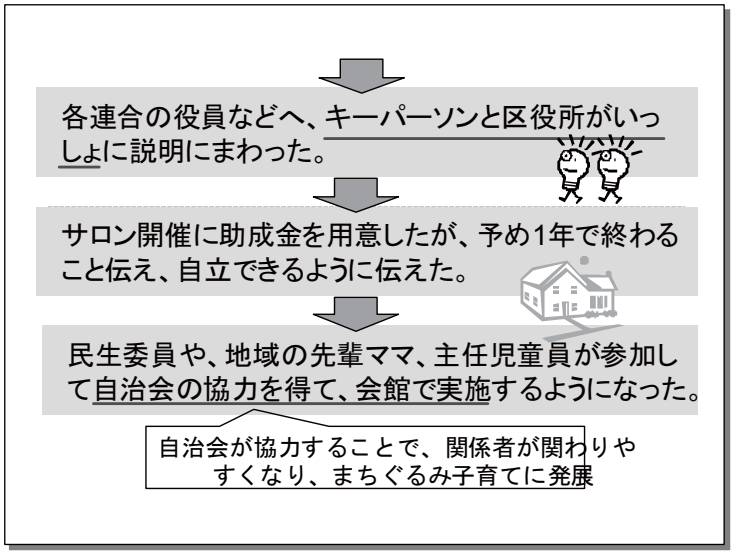


◇「地域にどのようなものがあれば子育て中の家族の支援になるのか」、議論し共有する場をつくりました。

まず、子育て連絡会議です。子育て支援グループのメンバーや保健師さん、そして、ここがミソですが、地域の中にはよくいらっしゃると思いますが、子育てとか学童の支援に関わりながら自治会の役員さんをやっている方、この神奈川区の事例では、このように自治会の役員も経験していて長らく学童保育にかかわっていらっしゃった方がこの子育て連絡会議に加わっています。

はじめ、子育て支援グループのメンバーの人たちは、地域で活動して行きたいので連合自治会の人たちに協力してもらいたいが難しいのではないか？と思っていました。でもこの学童にかかわっていた自治会役員の方が、「そんなことはない。協力してもらえるはずだ。やってみようよ。」ということで勇気付けられ、連合自治会の皆さんに協力をお願いしようということになりました。そして「連合自治会の役員さんらが集まる場」で子育て連絡会議の活動を承認してもらったんですね。うまく段取りを踏んでいるんだなということに気がつきます。承認を頂いているので、いくつかの連合自治会に出向いていっても話が通じやすく、応援してもらいやすい状況をつくることができました。

また、この子育て連絡会議では、子育て中のママへのニーズ調査だけでなく、もし子育てサロンなどを行うとしたら、その際にどのような応援をしていただけますか？といった調査を連合自治会の方へあわせて行っています。このような点も特徴ある事例かと思います。



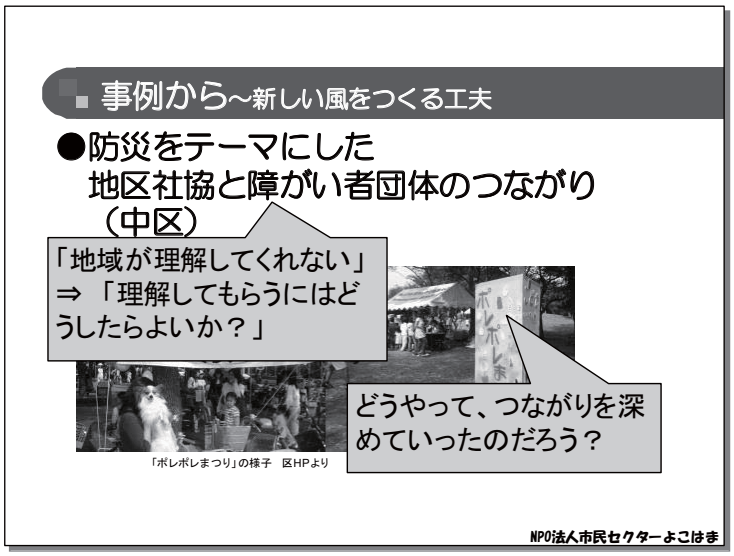
【スライド９】

その後、区内で順次、サロンが立ち上がっていくわけです。このような活動は「頼まれたから」ではなくて、地域の中で自立して取り組んでいけることが大切だと思うんですが、この事例の場合、地域の方に対し、「このサロンへの助成金は最初の１年間のみ、その後は自立してやっていけるようにぜひ地域で応援

をお願いします。」と伝えました。

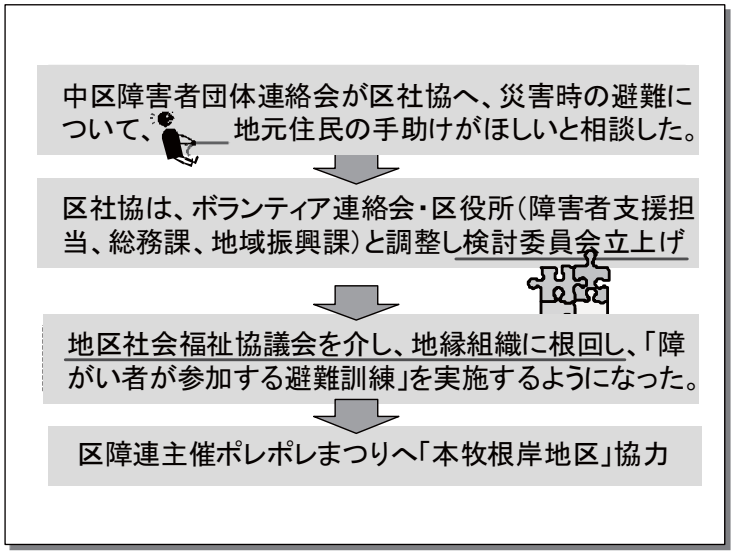
地域でやるということで、主任児童委員さんも加わり、また自治会などの応援をいただいたせいか、主任児童委員さんの周辺の方をはじめ、先輩ママたちが協力しやすくなっていきました。仲間づくり、支えあいづくりができていったわけです。

丁寧にニーズ調査や受け皿調査を行い、地域にどのようなものが必要なのか、勉強会を重ねたこと、そして区役所の人や顔の利く自治会ＯＢの方と一緒に、各連合自治会にお願いをしてまわったこと、こうしたことで最終的に自治会から応援をいただき、地域の方が関わりやすくなっていった、という事例です。



【スライド 10】

吉原：では次に、中区の事例をご紹介します。中区では「障がい者が参加する避難訓練」という避難訓練を実施しています。大地震などが起きたときに、要援護者の方をどう助けるか、皆さんの中にも地域で検討されている方も多いかと思います。中区は、障がい者作業所やグループホームがとても多い地域です。事例調査の際に、障がい者団体の方にインタビューしたのですが、「こういう取り組みをしていくうちに、意識が変わった」という実例を話してくれました。ずっと障がい者運動をしているけれども、どうして地域の方は自分たち障がい者のことをなかなか理解してくれないんだろう、「ノーマライゼーション」みんなで同じような暮らしをしようといいますが、それがなかなか進んでいかないのはどうしてだろうと思っていたそうですが、こういう活動を通して、「地域の方に理解してもらうにはどうしたらよいか」というように考えるようになったそうです。



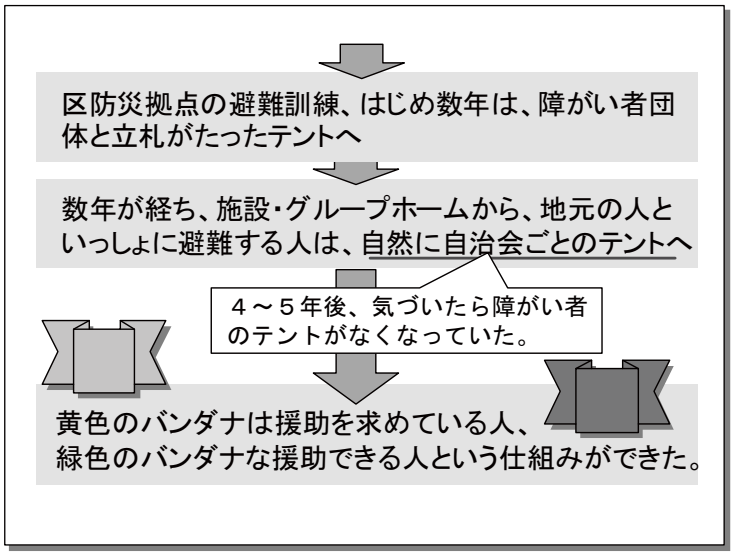
新しい風が吹くと、本当にお互いの意識が変わっていくようです。

【スライド 11】

さて、つながったきっかけをご紹介します。まず、中区障害者団体連絡会が中区社協へ、災害時の避難について地元住民の手助けがほしいと相談しました。そこで区社協はボラン

ティア連絡会と区役所の各課、障害者支援担当と総務課、地域振興課と調整して、この障がい者の避難訓練についての検討委員会を立ち上げました。そして各地区の地区社会福祉協議会を通して、自治会などの地縁組織に根回しを行い、この避難訓練を実施することができました。

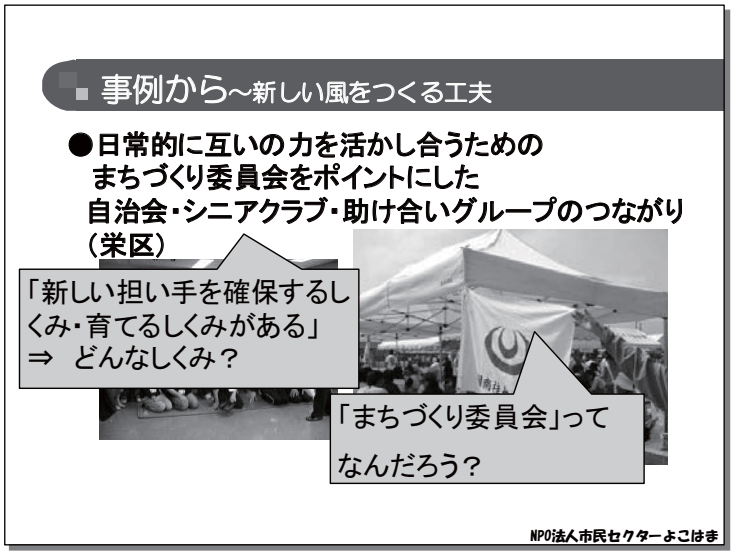
また、区障連は「ポレポレまつり」という、各施設や団体がバザーやお店を出したり、地域の方と協力してカレーや焼きそばを出したりステージの発表があったりするお祭りにおいて、「本牧根岸地区」の全面的な協力を得ることができるようになりました。



【スライド 12】

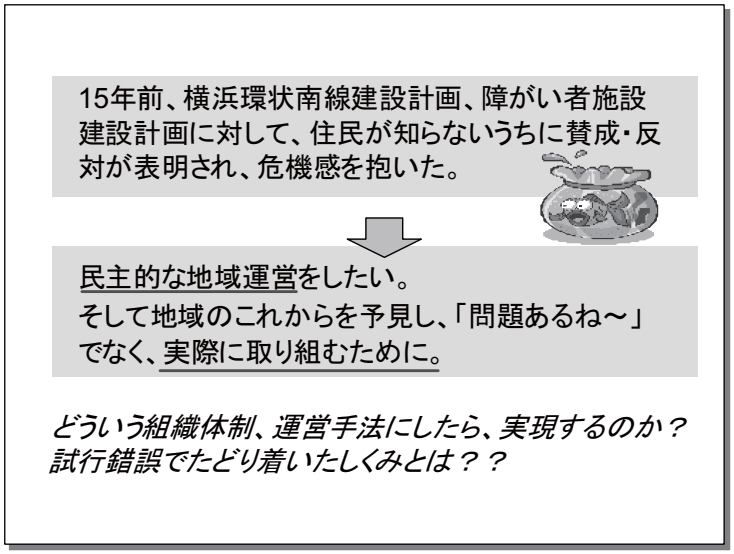
始めた頃は、「障がい者団体」というテントが建ちまして、「障がい者団体はこちらへ」という立て札が立っていたんですね。ところがはじめの数年の内に、グループホームから防災拠点に避難するときに、障がい者が地元の人と一緒に避難するように徐々になっていったそうです。そうすると、４～５年後の訓練では「障がい者」という立て札とテントが無くなっていたそうです。区障連の方によると、テントを無くそうと言ったわけでもなく、気が付いたら自然に「無い」状態になっていたそうです。必要ないから無くなっていた、本物の「共に生きる」という姿かなと思います。

また、この黄色のバンダナ（援助を求めている人）、緑色のバンダナ（援助できる人）の取り組み、これは中区が発祥の地で、この緑区でも取り組まれているところですが、地域の中の変化というのは時間がかかるもので、また、地域の人の意識が変わっていくには時間がかかるものですけれど、このように協働で進めていくと、「あせらず」「ゆっくり」「何度もくり返す」ということがポイントになって、そのかわり得られるものは本物中の本物、本当に素敵な宝物が生まれるのではないかなと思っています。



【スライド 13】

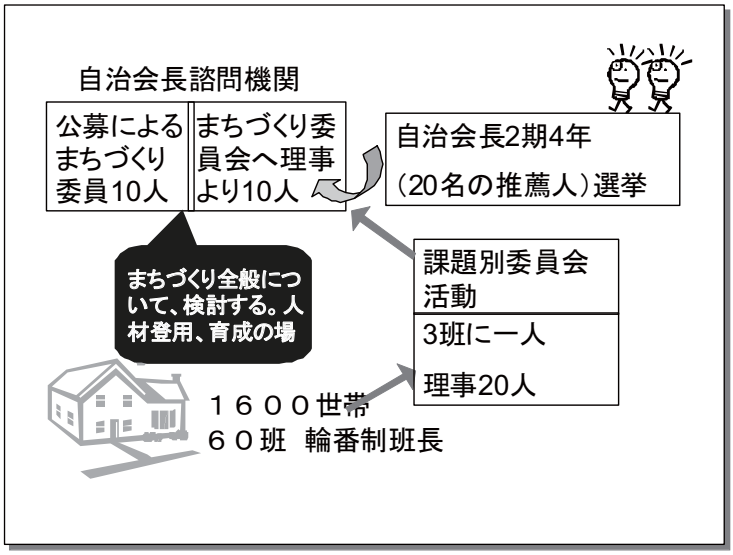
栄区には輪番制班長のしくみを逆手にとって、地域人材の掘り起こしを行っている自治会があります。輪番制だけではなかなか積み上がって行かないので独自の活動をされているわけですが、その事例を見ていきましょう。



【スライド 14】

この湘南桂台自治会は、約 1,600 世帯の大きな自治会ですが、今から 15 年ほど前、横浜環状南線建設計画について、いつのまにか「住民は賛成」となっていた。また、重度重複障害者通所施設「朋」の建設工事が持ち上がったときに、「高級住宅地にそのようなものができるなんて」というような意見があるかのような記事が新聞に掲載されたことがあったんそうです。ところが、この二つの計画があることを地域の住民へは知らされていなかったそうです。

それでなんとか民主的な地域運営をして行きたい。そして地域のこれからを予見し、「問題あるね」だけではなく、実際にみんなで取り組んでいこうと考える人たちが現れたそうです。その人たちが中心になって、民主的な地域自治の仕組みが出来上がっていきました。

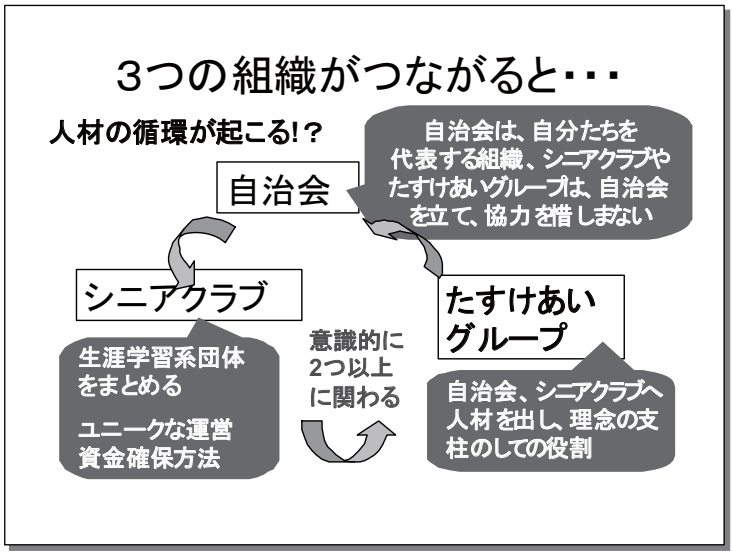


【スライド 15】

湘南桂台自治会は 1,600 世帯、60 班の輪番制班長から、３班に一人の割合で理事が 20 人選ばれ、その 20 人が分かれて、環境や防犯といった課題別委員会活動が行われます。輪番制だけだと積み上がっていきま

せんので、自治会長と数人の役員だけは２期４年を勤めることになっています。自治会長になるには 20 人の推薦人が必要で、選挙で選ばれます。なぜ４年かというのは、一仕事にケリをつけるのには４年必要、ということだそうです。

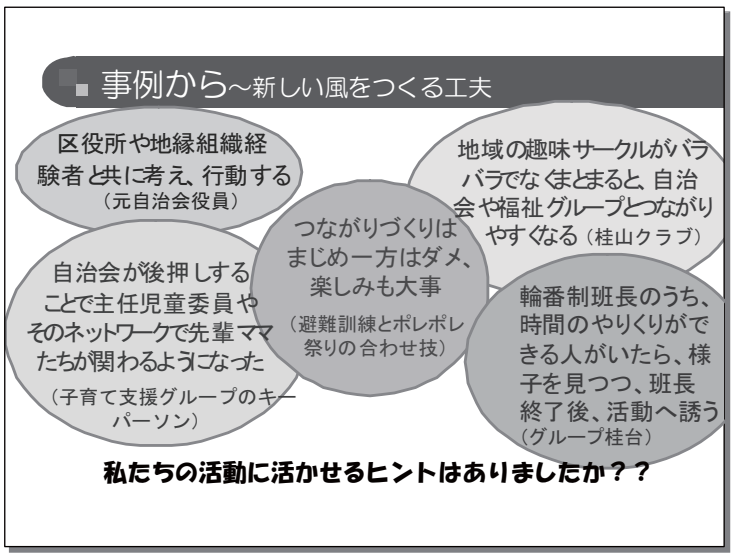
この自治会長の諮問機関として「まちづくり委員会」というのがあります。委員の半数は 1,600 世帯から持ち上がってきた理事 10 人です。残りの 10 人というのは、「民主的な地域運営」の一環として作られた「公募」で選ばれた 10 人で、誰もがこの委員会に参加することができるしくみとなっています。この「まちづくり委員会」がつなぎの役割を果たし、この地域の理念や活動の支柱となって自主的な活動が進められていますし、この場が活動へのスカウトの場にもなっています。１年間、一緒に取り組んだ中で、「この人は」という方に対し「ぜひお願いします。」という誘いをかけて、他のいろんな活動に移っていきます。



【スライド 16】

その移っていく先というのが「たすけあいグループ」や「シニアクラブ」です。この３つのグループが協力しあいながら、人材の循環を作り上げています。

ここでポイントなのは、自治会が一番えらい、というスタンスを取るというところです。自治会というのは自分たちを代表する組織、シニアクラブやたすけあいグループは自治会を立て、協力を惜しまないということを不文律にしています。特にシニアクラブは、さまざまな趣味活動があり、60 代の居住者が多いこの地域では大はやりですし、地域仲間と出会う場にもなっています。もとは老人クラブだったのが、もっと若い人を取り込むにはということでシニアクラブという名前に変え、地域で自主的に行われていたサークルに「どうぞ、どうぞ」と声かけをしてクラブが出来上がりました。シニアクラブの運営はクラブが行い、そこに何十ものサークルがぶら下がっている形ですので気軽に参加することができます。区の広報配布の役割を自治会から受託し活動資金を得たり、仲間が自治会の役員になった時には、サークルを挙げて活動を助け合うといったりと、もちつもたれつの関係をつくり、ここでも人材を出していくなど工夫がなされています。



【スライド 17】

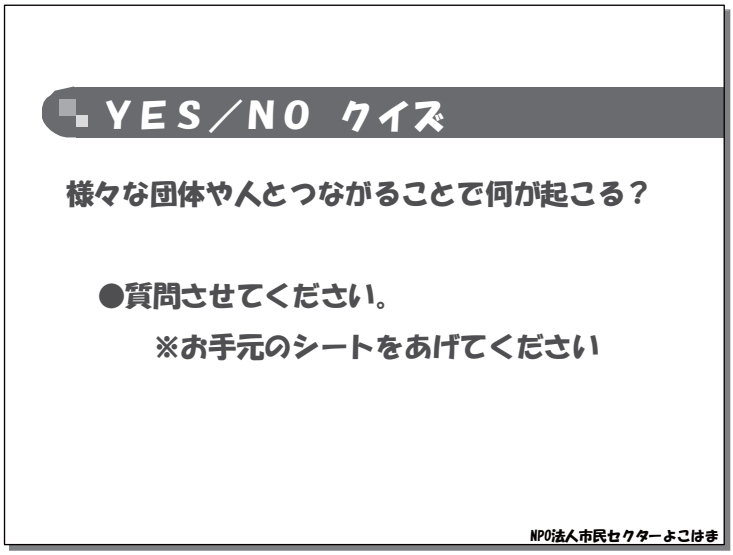
石井：これまでの三つの事例から、いろんなきっかけを元につながりを作って、それが新しい活動を生み出しているということがわかりました。

●神奈川区の地域ぐるみ子育ての事例では、子育て支援グループのメンバーで「やってみようよ。」と勇気付けをしたところから実際の活動が更にぐっと始まっていったことがわかりました。そして、自治会が応援をしたことでいろんな先輩ママたちや主任児童委員さんたちが関わりやすくなっていったということがわかりました。

●中区の「ポレポレまつり」、地域と障がいのある方とのつながりについては、区社協がつながりのサポートをしていった。お互いの信頼関係、顔の見える関係を作っていこうということでお祭りをうまく活用していったということがわかりました。

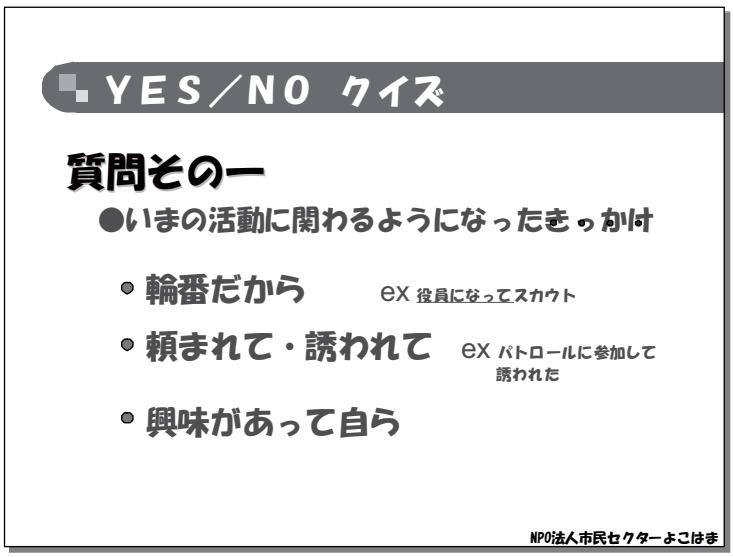
●栄区の事例では、特にユニークだったのは、地域の中のたくさんある趣味のサークルを束ね、そこにどんな人材がいるのか、どんなところに力のある人がいるのかということが把握される仕組みになっていて、その方たちを自治会が連携して支援していく流れがうまくでき上がっていました。

このようにつながるきっかけ、そのきっかけから活動へと、さまざまなサポートがあったことがわかります。



【スライド 18】

吉原：配布資料の中に、付箋が付いた台紙があります。これから質問をさせていただきますが、ＹＥＳの場合は、台紙を上に出していただければと思います。



【スライド 19】

●いまの活動に関わるようになったきっかけは何ですか？

○輪番だから → １～２割の方がＹＥＳ

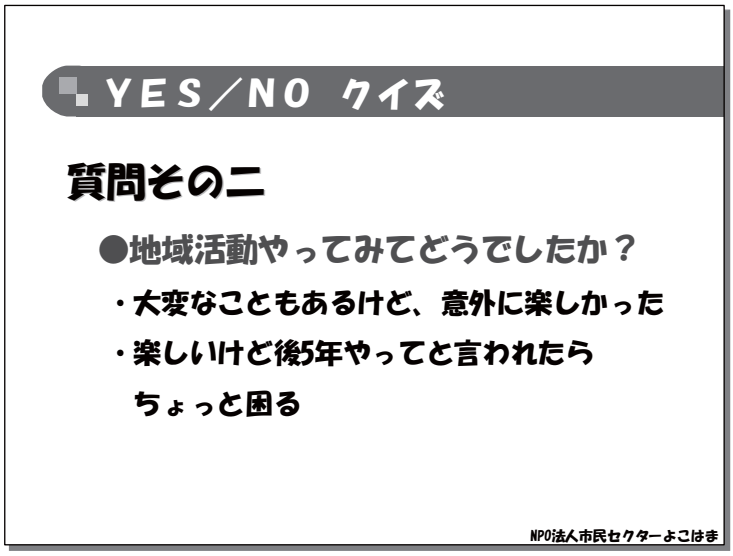
○頼まれて・誘われて

→　大多数の方がＹＥＳ

○仕方なく、背中を押されて

→　数人の方がＹＥＳ

○興味があって　→　数十人の方がＹＥＳ



【スライド 20】

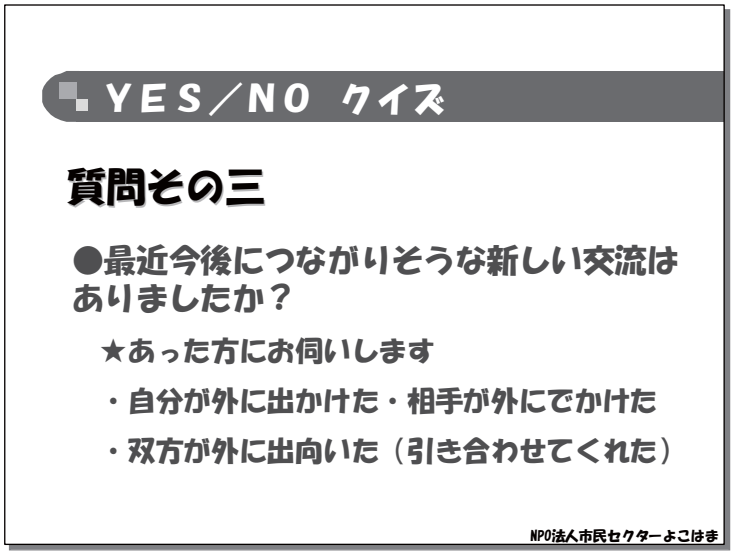
●地域活動をやってみてどうでしたか？

○やってみてよかったという方

→　９割程度の方がＹＥＳ

○楽しいけれど、あと５年がんばってと言われたら困るという方

→　大多数の方がＹＥＳ



【スライド 21】

●ここ３ヶ月でいつもの地域仲間でない人と出会いがあったという方

→　数十人の方がＹＥＳ

○そのうち、ご自身が外へ出かけたので新しい出会いがあったという方

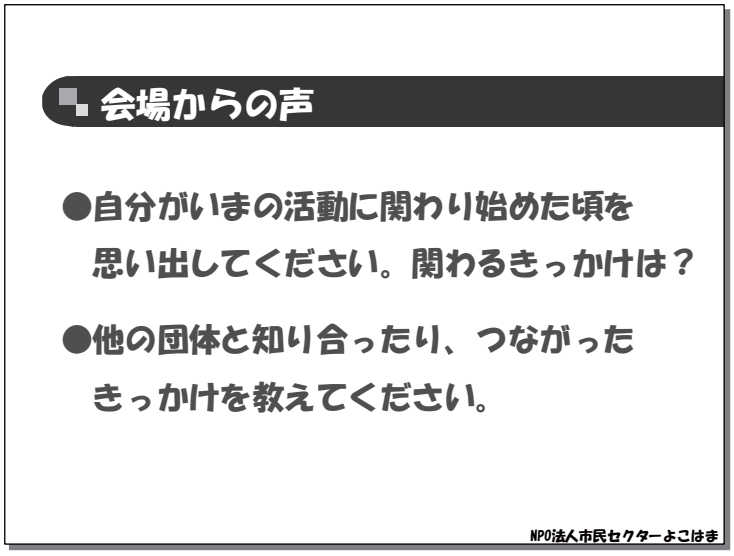
→　数十人の方がＹＥＳ

○外の人が出かけてきてくれたという方

→　十数人の方がＹＥＳ

○区役所や区社協といったところで引き合わせてくれたという方　→　十数人の方がＹＥＳ

これまでの回答を拝見して、地域仲間が数多くいらっしゃるので仲間内で話が済んでしまっているのではないかと思いましたが、新しい出会いも沢山あるということで安心しました。つまり、皆さんは誘われて、あるいは頼まれてこの活動に入られた方が多く、楽しいけれど五年後もと言われるとそれは次の人が跡を継いでほしいと思っておられる方が多くて、やっぱり外にどんどん出て行かないと人とはつながれないんだよねという意識が高い、というように拝見させていただきました。どうもありがとうございます。



【スライド 22】

会場から生の声を頂きたいと思います。自分が今の活動に関わり始めたきっかけを思い出していただいて、実はひょんなことで自分はこのような活動に入ることになったんだよ、ほかの人にも聞いてほしいという方はいらっしゃいますでしょうか。

それでは事前にお願いをしておりました方にお話いただきたいと思います。

●緑区手をつなぐ育成会です。

私は知的障がい者の親です。今まで障がい者団体の中で活動をしてきました。19 年度から、区社協で行われていた「知っとこ・やっとこフォーラム」に誘われて出かけていったという段階がありました。その場で育成会の恩人である先生とお会いすることで、育成会の方で後見人に関する勉強会を行うことができました。このような機会はとてもいいことだと思いまして、今年度の「オトナの一期一会」にも引き続き出させていただいております。そしてここでもまた新しい方々と出会うことができました。

障がい者団体ですので、ボランティア関係の方とはどうしても出会いが少ない、地域で活動している方とも出会いが少なかったのですが、そういう方々とお話をし知り合うことができ、緑区の中には地域のために働いている方がこんなに沢山いらっしゃるということをあらためて実感しています。

このように知り合うことで私たちと皆さんとの活動が広がっていくのではないかなと、そういう予感がする毎日です。

吉原：どうもありがとうございます。19 年と 20 年と、いい出会いがいっぱいあったとのことです。

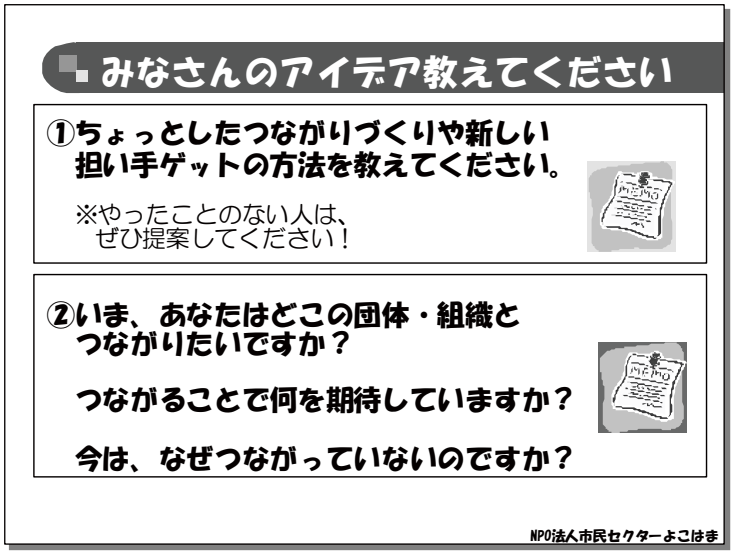
●「男の出番」というボランティア団体です。

人とのつながりというよりも、われわれはボランティアを主体につながっていこうというふうに考えておりました。定年後の生活は何をしようかな、と退職した時点では考えていました。家内から「何かしてよ」というように背中を押されたわけですが、さあ、何をしようか、何もわからなかったわけです、どのような方向で何をするのか。たまたま男性のためのボランティアグループの育成という講座があり、それに参加したのが「男の出番」の始まりでした。ちょうど私が定年退職するときでしたので同時に私はそこに入ったことがきっかけでした。

このグループの代表としてお伝えしたいことは「親切は借り物である」ということです。親切は借り物です。必ずどこかでお返ししましょう。実際、親切といっても自分でやるには照れくさくてできないですよ。ところがこのようにグループになって「親切」しましょうかといえば、勇気が出てきます。それで今、43 名の人間がグループとして、また今日も７名が参加しているわけです。このように、親切は必ずお返しするし、決して自分のものにしてしまってはならない。次の人へ、次の人へとつないでいくためにみんながこのような形で参加する。私は常に思っているのですが、私たちが親切をすると、親切を受けた人はまた次の親切をしてもらえる。私たちが始めるとおそらく次はどなたかがわれわれに親切をしていただけるのではないか。相手は既に忘れているかもしれませんが、「親切」を２倍、３倍、４倍にして返します。43 名の人間がそれぞれそれだけの親切を緑区で発揮すればもっともっと大きな親切がでてくるのではないかと思います。

本日、ここにいらっしゃいます奥様方にお願いします。「あなた、ボランティアでもしてよ。」と一言、ご主人に言っていただきましたら本当にありがたいと思います。

吉原：ありがとうございます。非常にすばらしいお話でした。一人ではなかなか勇気がでないけれど、グループになると勇気が生まれる、本当にいいことを教えていただきました。



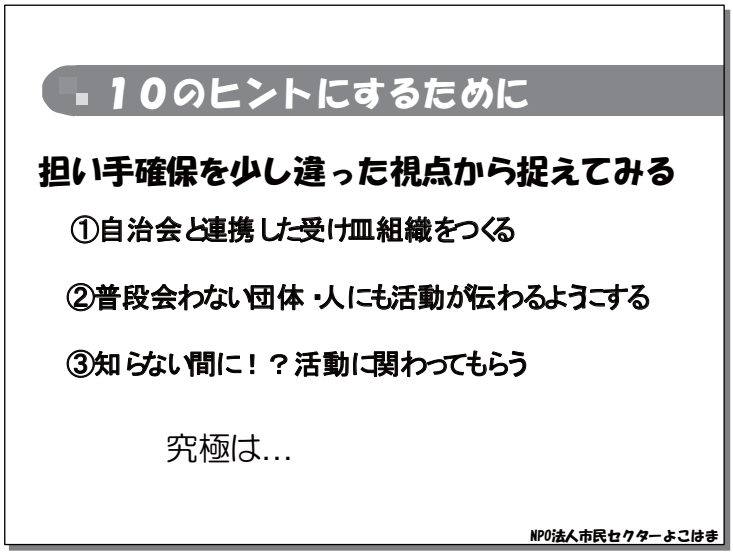
【スライド 23】

今、神奈川区や中区、栄区の事例を聞かれてどのように思われましたでしょうか。すごいなと思われた一方で、あれぐらいのことは緑区でもやっているよ、と心の中で思われませんでしたか。いろんなことを自分はやっているよ、それを人に話をしたい、と思われま

せんでしたか。ぜひお手元の付箋に残して、講演終了後、出口のホワイトボートに張って、緑区の他の皆さんに教えてあげてほしいです。

一枚目の付箋には、ちょっとしたつながりづくりとか、新しい担い手ゲット、自分が誘われたときの殺し文句、「あなたのお人柄を見込んで」などでも結構です。それをぜひ書いてください。もし、自分はやったことがない、誘われたときのことも頼まれたときのことも忘れてしまったという方は、これからの時代だったらこんなやり方をしたら乗ってくるのではないか、入ってくるのではないか、というアイデアを付箋に書いていただけたらと思います。先ほど、ほとんどの方が「頼まれて」参加したという話でしたから、そのとき頼まれた「殺し文句」を、すごいノウハウを書いてください。

そして二枚目の付箋には、これからどんな団体・組織とつながりたいと考えているかを書いていただけたらと思います。



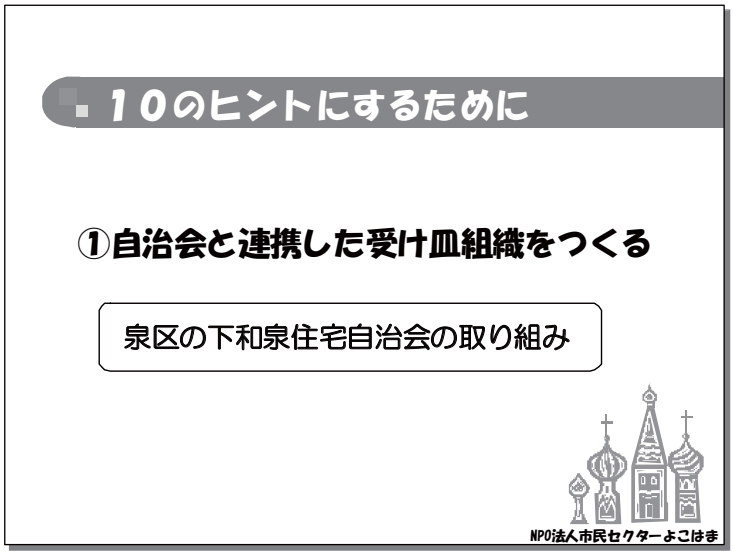
【スライド 24】

石井：最後に、担い手確保という観点からお話をさせていただきたいと思います。視点を３つ、考えてきました。

①　自治会と連携して、担い手・地域の人材を受け止めるような組織・グループをつくろう。

②　普段会わない団体や人にも活動が伝わるようにする、このような視点から担い手確保を考えよう。

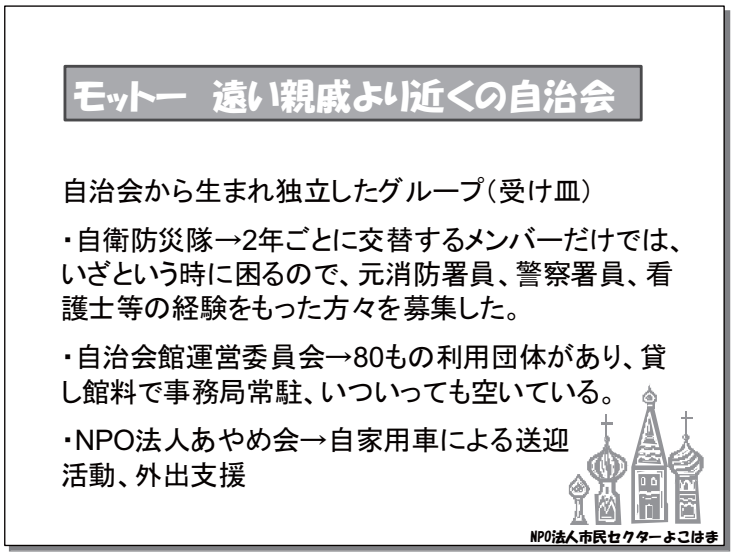
③　知らない間に活動に関わってもらう。



【スライド 25】

吉原：下和泉住宅自治会の事例をご紹介します。この下和泉住宅自治会のモットーは「遠い親戚より近くの自治会」です。コミュニティーバスを走らせるなどの活動している自治会ですが、いろんな工夫の中でこれは使えるのではないか、もしかしたら皆さん既にやっていらっしゃるかもしれないんですけれども、自治会直属ではなく、自治会が後押しもし、

応援もするんですけれど、独立したグループをいくつか立ち上げて、例えば、輪番制が空けた班長さんとか、いろんな方が関わりやすいような仕組みを作っておられます。

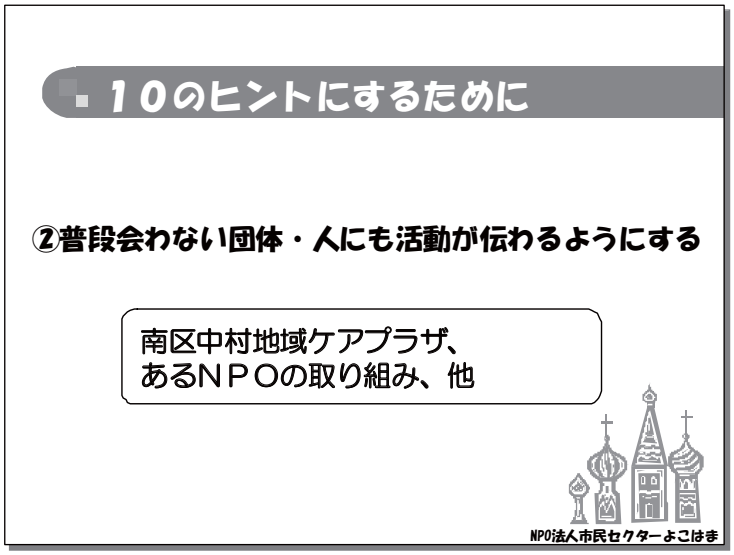


【スライド 26】

その一つが「自衛防災隊」です。防災隊のメンバーは２年ごとに交代する輪番制ですが、防災隊のメンバーだけではいざという時に困ります。ノウハウも蓄積されていきません。そこで、元消防署員や警察署員、看護師等の経験を持った方を募集してつくったのが「自衛防災隊」です。自治会館は平屋ですが、その屋根裏に防災に関わるものがびっしりと備蓄されています。

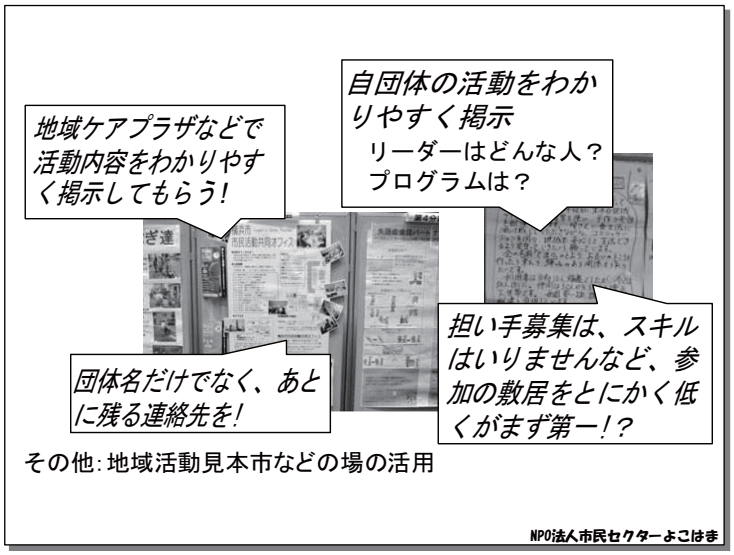
また、その自治会館を建設する際に、資金を「借りる」という方式で、自治会費で返していくという形にしたそうです。借金をして大きな自治会館を建てたのですが、部屋がいくつもあり、市民グループや福祉、子育てといったいろいろなグループがそこを活用しています。若干ですが利用料収入があり、それを資金として事務局が自治会館に常駐しています。そのため、自治会館は常時、開いている状態となっている。

また、「あやめ会」という自家用車による送迎活動を行う団体をつくり、事業のためにＮＰＯ法人格をとられたそうです。このような活動の場がさまざまな形で用意されていることもコツかなと思います。



【スライド 27】

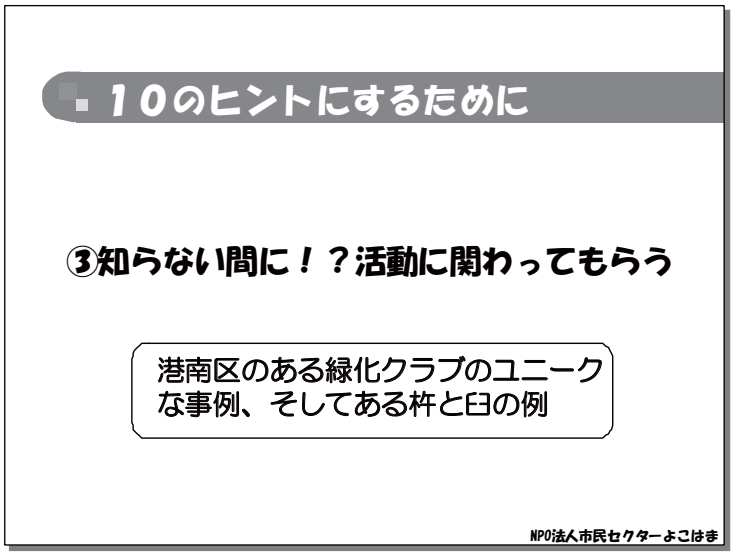
石井：２つめの視点ですが、普段、手のとどかない、出会わない団体・人たちに、どう活動に参加していただくかということです。そのような人たちに自分たちの活動をわかりやすく、見えるように伝えようではないか、というような視点です。



【スライド 28】

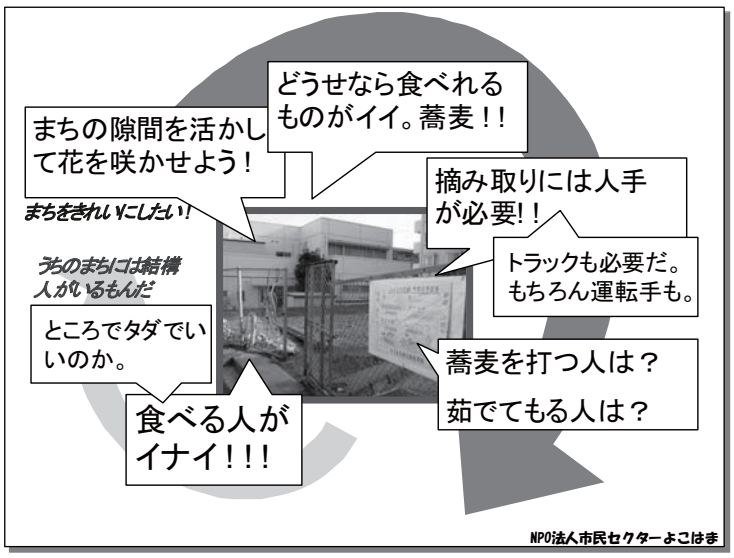
何をやっているのかわからないと思われる活動に人はなかなか入ってこられないわけです。この事例では、防犯パトロールや、ボランティアグループの活動などでも、写真をつかってケアプラザなどで掲示し紹介しています。このようなことを意識的に行っているわけですが、そうすると、普段、自治会の活動には縁がない人に対しても「地域ではこんな活動しているんだ」ということが伝わりやすくなります。

また、このようなときに意外に忘れてやすいのが、団体名は入れても、あるいは大きくいれても、連絡先を入れることを忘れてしまう、あるいは小さくいれているということです。それから活動を紹介するときに、活動をやっている人たちの様子がわかるような説明やプログラムなど加えることです。例えば、サロン活動の掲示で「みんなで楽しく集いましょう。」という文句はよくあるのですが、このあとに例えば「コーラスをやっています」とか「この日はうどんが食べられます」とか「この日は何かもらえます」といった具体的な内容まで書いてあると、自分が参加していいのかなとか、参加しやすいなと思ってもらえるのではないでしょうか。このようなことはちょっとしたことですが、より重要かと思います。あと、担い手の募集のところに「スキルはいりません！」と書いていますが、どなたでもお気軽にと、入りやすいというようなメッセージがあるといいのではないかと思います。



【スライド 29】

最後に、「知らない間に！？活動に関わってもらう」です。これは、つながりや担い手確保では、一番お得感があるようです。



【スライド 30】

この事例は、緑区でもよくあるのではないかと予想するような内容です。「まちをきれいにしたい！」という活動から始まった、自治会とは別の団体である緑化クラブの活動です。まちの花壇や自治会館の裏の空き地をもっと美しくしよう！と、数人が始めたものです。

最初は、パンジーとか季節の花を植えていましたが、ある年から、「どうせなら食べられるものがイイ!!」となったわけです。そこで蕎麦を植えました。蕎麦は土壌がよくなくても育つようで、理にかなっていたようです。そして収穫のときになると今度は人が足りない、運ぶ段階になるとトラックも必要だということで、自治会の方に協力をしてもらいました。自治会の役員や、婦人部など大勢が協力しました。花が咲くからそれを見てみなさん蕎麦だとわかっていたようです。次に、収穫したけれど、蕎麦を打つ人がいない。しかしこの事例では蕎麦を打つ人がいたんですね。セミプロみたいな方がいて、その人を中心に数人の男性が蕎麦を打ち、その奥様や、婦人部の方たちなどで茹でて調理しました。

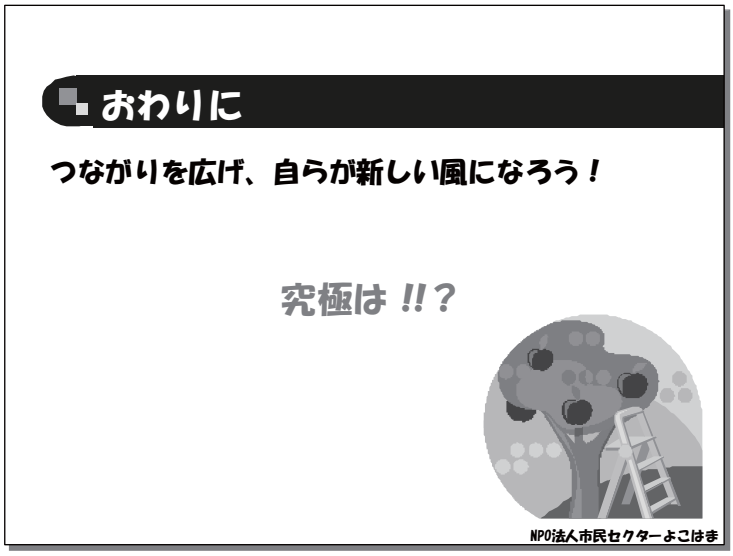
さてここまできてまた問題がありました。食べる人がいないじゃないか、ということでした。この事例は花を植えることから始まったのでこのような経過となりました。よろこんで食べてくれる人がいないと「やりがい」がないということで、老人会の方や子ども会の方といったさまざま人に声かけをして食べることにお付き合いしてもらおうということになりました。私も「食べること」に参加しました。町内会以外の方は 200 円ということで、数万円のお金が集まったようです。このように、「花を咲かせよう！」は２、３人から始まったものですが、蕎麦を食べるころには、まちのほとんどの人が参加していたという例です。

まちには結構「人」がいるものだということもわかりましたが、それだけでなく、一緒に体を動かし、知らない人と知り合い、しかもとてもたくさんの笑顔で本当によい雰囲気だったことを私は覚えています。

この蕎麦の例は、摘み取る人から食べる人まで、いろんな「ない」を蕎麦でつないで、気付いたら担い手や参加者が増えていたというとてもユニークな事例です。

吉原：資料の 12 ページをご覧ください。「５【○○（モノ）がない】ことをオープンにした。」にある内容は緑区の事例です。ある福祉施設で餅つきをしたいが臼と杵がないということになってしまいました。そこで、施設に出入りしているボランティアの方が近所の方に頼んでくれました。そうすると臼と杵だけでなく近所の方も福祉施設に来て頂くことができました。そうすると今度は「もち米の蒸し方も、つきか

たもわからない」というので、さらに近所の人たちの出入りが始まりました。そうすると「みんな一生懸命やっているんだ。応援してやらなくちゃ」ということで地域に根付いた福祉施設になり、近所の人たちともいい交流になっているという事例です。このほかにも資料には「〇〇する人がいない」「〇〇で困っている」という事例を掲載していますのでご覧ください。



【スライド 31】

私が地元の自治会で副会長を勤めた際、連合自治会の会合や行事に出ていたわけですが、地域の仲間の方々は本当に仲がよくて、しかも５年、１０年と長く取り組んでいるので、私のような新参者に対しては気をつかっては頂けるんですが、「いいな～、あんなに仲が良くて」と思っていました。皆さん、あれができてあれをもっていて、ということをお互いにご存知なんですね。いざ困ったというときに、仲間内で助け合うことができます。ただこれは、つながり作りの際には不利ではないかと思います。それで私が最後に提案したいことですが、「自分たちの仲間内でできることでも、わざわざ外の人に頼みましょう」ということです。「やっていくということに自分たちがなれていても、「わざわざ」外の人を誘いましょう」ということです。特に言われてもいないけれど、目に付いた講座や、他の団体のイベントに「わざわざ」でかけましょう、ということでもあります。キーワードは「わざわざ」です。逆さにすると「ざわざわ」ということに気が付きました。「ざわわ、ざわわ、ざわわ～♪」という歌いだしの歌があります。この歌は「風」が吹く歌です。自分たちが行うのではなく、ぜひ「わざわざ」「ざわわ」ということを思い出してください。

今日は４００人以上の方に参加していただいていますが、新しい風を皆さんで、４００の風がもっともっと緑区に吹きまくることを期待しています。これで本日の講演を終わらせていただきます。ありがとうございました。

【スライド 32】

２　講演会配布資料

地域に新しい風をつくる10のヒント

～地域仲間を増やす方法～

地域活動の担い手不足や高齢化はどこの地域でも共通の課題です。そこで、あの手この手で地域仲間を増やすことに取り組んでいる事例を「地縁型組織とテーマ型組織の協働モデル事業ヒアリング調査」などから、7つご紹介します。

後の3つは本日の講演の中から、皆さん自身で見つけて完成させてください。

★世代別傾向と対策★

昼間地域にいる方々は、子育て中のママか子育てひと段落した先輩ママ、主婦の皆さん、そしてシニア層ではないでしょうか。夜や土日は現役世代もいらっしゃいます。どのようにお誘いすればうまくいくのか、実例をご紹介します。

1.【子育て一段落先輩ママ】 同世代か少し上から誘ってもらう

～地域子育てサロンの代表（30 代女性）と主任児童委員のお話から～

◆　月に１度程度の活動なら気分転換になったり、地域の中に仲間がいる楽しさが実感できたり、というメリットも多い。楽しくなれば、おのずと活動は増えていく。主任児童委員さんから引き継ぎいまは代表になったが、バックアップしてくれる方があるので、やりやすい。【子育てサロン代表 30 代女性】

◆　「月に１度だけでいいから、手伝ってくれない？」「〇〇さんと都合つけあって、交代でいいから、きてくれない？」など、負担感を少なくした「お願い」を遠慮せずにする。できれば同年代ぐらいの人から誘ってもらい、徐々に若い人に任せ、褒め役、バックアップにまわる。子育てサロンにきている利用者も、担い手予備軍として「子どもをみているから話し合いに加わって」など、運営側になじんでもらうステップを支援する。　【主任児童委員】

◆　赤ちゃん教室へ通うママたちに保健師が活動を紹介するので、毎回新しい利用者が来る。出会いの宝庫になっている。

【神奈川区　三ッ沢地区子育てサロンにて】

2.【現役世代】ストレス解消企画が有効

◆　老人クラブを改称・改編し、「シニアクラブ」として、いろいろな生涯学習・趣味サークルのネットワーク組織とした。面倒な全体管理はクラブがやるから、登録して、と呼びかけたところ、多くのサークルが表に見えるようになり、５０代の人も活動に入ってくるようになった。テニス、ゴルフ、囲碁（レベル別）、麻雀、写真、ウォーキング、書道、生け花、絵画などなど、いろいろな活動を楽しみながらやっている。　【シニアクラブ代表】

◆　意識的にシニアクラブの活動に参加し、信頼関係をつくり、地域活動にもお誘いする。　【たすけあい団体代表】

◆　サークルごとに良い意味の派閥をつくり、サークルの仲間が自治会役員などを担っている際には、祭りの準備などに積極的に協力する伝統をつくった。
【自治会長】（栄区湘南桂台地区にて）

～番外編～

◆　世帯数の少ないある自治会では日本酒好きの会員宅で定期的に「利き酒の会」を行い、そこへ男性居住者を誘い地域活動の文字通り呼び水にしている。定年になる前から、できる範囲で地域活動を手伝ってもらう。世帯数が少ない自治会でも、顔が見えるメリットを活かし、少しずつ担い合う作戦で活動を充実させている。　【連合町内会長】（泉区中川連合自治会にて）

3.【主婦】　得意なところなら力が出しやすい

◆　地域作業所ができたときに、週に１度でいいから昼食を作ってほしい、と］頼まれた。そこでお料理自慢の主婦数人に声をかけ、金曜日だけ昼食を作りに行っているうちに、お料理なら手伝えるという輪ができて「エプロンクラブ」という名前がつき、以来十数年が経つ。

日ごろ地域にいる主婦は、自治会や連合町内会から役割を頼まれることも多いので、連合の運動会などの地域行事に作業所も誘うことを働きかけた。また逆に不登校の中学生をボランティアとして作業所に受け入れてもらい元気を取り戻した、などの良い関係が積み重なり、すっかり地域仲間になった。
【元保護司、元民生委員】（泉区新橋地区にて）

4.【シニア世代】

好きなことだけではやがて飽きる、まちのために働くことと両方を

◆　輪番制班長は毎年 60 人いる。3 班ごとに１人が理事となり、20 人で委員会活動を行う。その理事の中からまちづくり委員会に出る人 10 人を選んでもらうという３段階選抜のしくみをとっている。　【自治会長】

◆　まちづくり委員会には必然的に時間的にやれる人、やってもらいたい人、やる気のある人が集まることになり、そこで自治会のみならず、ハード・ソフトのまちづくり全体について話し合い、そこで自分たちのまちは自分たちで良くしていくという理念が継承される。

【まちづくり委員会委員・たすけあいグループ代表】

◆　自治会理事は1年で終わりだが、シニアクラブ、たすけあいグループからスカウトを受け、毎年新しい20人の理事の大半が次の年、地域活動の担い手になっていく。楽しみを分かち合う仲間とまちのために働く仲間、その両者が多様に重なりあいながら、まちづくりの担い手創出に取り組んでいる。

（栄区湘南桂台地区にて）

★　自分のほしいことをオープンにする編　★

5.【〇〇（モノ）がない】ことをオープンにした。

◆　「福祉施設で、餅つきしたいけど、うすと杵がないと言っている。貸してあげてほしい」とボランティアやっている近所の人に頼まれ、軽トラックで運んでやった。「もち米の蒸し方も、つきかたもわからない」というので、人を出して面倒見てやった。それ以来何かと頼りにされている。みんな一生懸命やっているし、応援してやらなくちゃ、という気がしてきた。　（緑区の事例より）

6.【〇〇する人がいない】ことをオープンにした。

◆　「そばを打つ人はいるけど、食べる人がいない」と言う誘い文句で港南区の緑化クラブは、イベント参加者を集め、集まった人を活動に誘った。特に「食べる人がいない」はいろいろな食べ物に応用が効く。

　トン汁やお汁粉など食べ物で人集めはよくやる手法だが「活動の楽しさ」を同時に語り次につながるよう、チラシなどを渡しておく、また誘ってよいか連絡先を聞いておくなどの、踏み込みが大事だと思われる。（港南区の事例より）

7.【〇〇で、困っている】ことをオープンにした。

◆　「〇〇についてはできていけど、△△についてはできていない」と言われ、それが自分の得意なことだったら、力を貸したくなるのでは？全面的に依存されることは重たいが、簡単にサポートできるならこちらも嬉しい、ということもある。商店街の中で花屋を営む福祉作業所は商店街きっての人気店になり集客に一役買う存在になった。商店仲間に花を売る以外の就労トレーニングをお願いしたところ、快く引き受けてくれた。　（港南区の事例より）

★講演の中からみつけたヒント★

8.

9.

10.

インタビュー調査結果概要

● 双方から出てきたキャッチフレーズ　「まちぐるみで子育て」

対象：神奈川区における各連合自治会町内会と子育て支援グループの協働によるサロンづくり

■ヒアリング対象と事業概要

ヒアリング対象	地縁型組織	三ツ沢上町付近に住む子育て支援に関わる方々、および子育て当事者などで構成された「三ツ沢地区すくすく子がめ隊」の中心メンバー（元主任児童委員谷口さん、代表佐藤さん他）
	利用者	三ッ沢地区すくすく子がめ隊利用者　４人
	テーマ型組織	NPO法人「親がめ」中心メンバーの塚原さん（子育て支援の活動を長年に渡り実践し、活動団体のネットワークの中心人物でもある）、山根さん（学童保育の活動を中心としつつ、町内会会長や地域福祉計画策定委員を務めてきた） ※旧神奈川区子育て連携会議「親がめ会議」が発展してできたのがNPO法人「親がめ」
	支援機関	神奈川区役所 サービス課、福祉保健課、地域振興課
事業の概要	活動対象エリア	神奈川区全域
	目指す仕組み	子育て支援を①まちぐるみで親子を見守る体制づくり　②親同士の仲間づくりの支援 と捉え、住民主体で取り組むことのできる仕組み、区全体の仕組みとすることを目指した。
	事業の主な内容	区内35か所で「親子のたまり場」を住民主体で開催することに成功している。その後、「親がめ会議」は子育て支援拠点の運営をコンペで獲得。NPO法人として「すくすく子がめ隊」を含めた地域子育ての場の支援を仕事として行える立場、拠点、安定的人材確保の財源を得た。
	利用者	子育て中の親・主に２歳ぐらいまでの乳児 【利用者のメリット】 ・身近なところ（区内35か所）に子育てサロンがあることで、気軽に参加できる。 ・月１回または２回程度であるが、地域の人に見守られている気がする。親同士が知り合いになって、サロンの場以外でもつながりができる。
	最初に共有した危機感	アップダウンのきつい神奈川区では、身近なところで親子の交流の場を作らないと子育て中の親は孤立してしまう。区で１か所、月１回などのイベント的な取り組みでは支援になりにくい。
	協働してここがよかった	まちぐるみでの子育ての必要性を各自治会町内会に理解してもらうとともに、住民主体で身近な「親子のたまり場」づくりを実現することができた。また、活動場所として自治会町内会館を活用できるようになった。
	地域特性	地形的にアップダウンが多く、急斜面の坂も多い。ベビーカーでの移動は近距離でないと難しい。身近なところに子育てサロンがないと行きにくい地域。乳幼児を持つ世帯の転入が多い。

■事例から学ぶ

●活動の根本的な意義をはじめに伝える。
●課題解決のための集まりの際に、お膳立てをし過ぎない。参加者が主体的に考えることができるようにする。
●みんなで目標を共有し、学びあう期間を十分にとる。
●ニーズ調査や受け皿調査を行い、ニーズや活動者の実状に基づいた事業の組み立てとする。
●区づくり事業として、助成金や位置づけを用意するが、予め1年で自立できるよう伝える。
●各地域に事業展開後も、活動の担い手同士が交流し、子育てサロンの意義や運営について学びあう場を設定する。

【賛同を得るためにキーパーソンや団体に対してどう対応したのか】
　地域で子育て支援を行う意義を活動者の立場で語れるキーパーソンと区役所が、ともに地域へ挨拶にまわる。

● 双方から出てきたキャッチフレーズ　「予見が活動をつくる」

対象：栄区湘南桂台自治会・在宅福祉の助け合いグループ「グループ桂台」・シニアクラブ「桂山クラブ」の協働によるまちづくり

■ヒアリング対象と事業概要

ヒアリング対象	地縁型組織	湘南桂台自治会役員
	利用者	実施せず
	テーマ型組織	グループ桂台の中心メンバー（湘南桂台地区を中心に在宅福祉の助け合い活動を行うテーマ型組織） 桂山クラブの中心メンバー（老人会を解散し、平成12年より新しい組織形態で始めた生涯学習系の活動を支援する組織） （注）桂山クラブ：湘南桂台地区独自の取り組みで仕組みに特徴がある。たくさんの活動グループがあり、またそれぞれに指導者がいるが、それらのグループはすべて桂山クラブの中に位置づけられ、活動の責任は桂山クラブがまとめて負っている。指導者と責任者を分けることで特定のグループに力が偏ることがなく、また人材も流動化することが期待されている。
	支援機関	桂台地域ケアプラザ　栄区役所福祉保健課
事業の概要	活動対象エリア	栄区湘南桂台地区（グループ桂台の活動エリアは自治会を超え周辺まで）
	目指す仕組み	①地域の課題解決のための合意形成を住民自らが行えるようにする。 ②民主的な地域運営とする。 ③地域のこれからを予見して、それに対応し「“問題あるね～”ではなく、実際に取り組む」
	事業の主な内容	民主的な自治会活動を中心に、在宅福祉のたすけあい活動、シニアクラブが連携して、住民主体のまちづくりを行っている。
	利用者	栄区湘南桂台地区を中心に地域住民
	最初に共有した危機感	15年前の横浜環状南線建設計画、障害者施設建設計画に対して、住民が知らないうちに一部の自治会役員により賛成・反対が表明され、危機感を抱いた。
	協働してここがよかった	自治会活動は理事会を中心に行われるが、「まちづくり委員会」が自治会長諮問機関として機能し、“まちづくり”全般に関わって、中長期的な企画を担当している。ここに、理事が委員として毎年10人参加している。その結果、自治意識の醸成ができたり、各組織の人材供給源ともなっている。毎年続けた結果、自治会・シニアクラブ、たすけあい団体のいずれか、または複数に関わる人が多くなり、顔の見える関係づくり、地域課題解決に向けた連帯した活動が可能となっている。 （注）理事は、1年交代輪番の班長から互選で、3班から1人選出され、任期は1年である。また「まちづくり委員会」は、地区計画の補完が主任務であったが、「まちづくり」全般の役割を担うようになった。委員は公募、推薦で選出され、総会で承認を受けるのが特徴である。
	地域特性	約30年前に大規模開発された約1600世帯が住む閑静な戸建て住宅地。一戸あたりの敷地面積は広く経済的にゆとりのある方が多く住む地域という印象を持つ。港南台または大船からバス便であるが、家族による車送迎もよく見られる。新住民だけの地域。

■事例から学ぶ

- ●区の助成金は、地縁型組織とテーマ型組織の協働事業に積極的に助成する。（協働して行う事業を積極的に評価）
- ●区の助成金は、分野を問わない統合型が地域にとっては使いやすい。（異分野のテーマが混ざっている連続講座など）
- ●助成団体が集まる交流会など多分野の団体同士が知り合う機会を設ける。
- ●助成金は事業費の3分の2助成とするなど、団体側の自主財源が多額にならないように配慮する。これにより団体の申請がしやすくなる。
- ●ふれあい助成金をもらっている団体にも、運営費助成と事業費助成を区別するなどの工夫によって両方の助成を受けられるようにする。
- ●地域団体や自治会へのヒアリングに力を入れる。来訪があるキーパーソンだけでなく、エリア全体に点在するキーパーソンとつながる努力をする。
- ●支え合い連絡会や分科会に、自治会役員なども参画するよう呼びかけをする。
- ●支え合い連絡会や分科会では、その際に出る地域課題を把握し、それをどう解決しているのか積極的に引き出す。
- ●例えば一つの町内会では解決できないことを近隣の町内会や課題にあったテーマ型組織と連携することで、相互に持っている知恵と経験を活かし合い、地域自らが乗り切ることができるようなつなぎ役を担う。

● 双方から出てきたキャッチフレーズ　「障がい者とまちの人がお互いを知り合うための『ポレポレ』（ゆっくり行こう）」

対象：『中区ポレポレまつり』と区防災拠点の避難訓練を通じた障害者作業所・グループホームと地縁型組織の協働によるまちづくり

■ヒアリング対象と事業概要

ヒアリング対象	地縁型組織	中区本牧・根岸地区社会福祉協議会岩村会長（本牧・根岸地区連合町内会会長・本牧元町東部町内会会長）
	利用者	実施せず
	テーマ型組織	中区障害者団体連絡会代表　室津滋樹さん ポレポレまつり実行委員長　青柳正彦さん （注）ポレポレまつり：区内の障がい者団体と本牧・根岸地区を中心とした交流イベント
事業の概要	支援機関	中区社会福祉協議会
	活動対象エリア	中区内
	目指す仕組み	①ポレポレまつり：地域での障がい者理解と、地域作業所の物品販売等を通じた財源確保。 ②区防災拠点避難訓練：中区、特に本牧地区には障がい者の作業所やグループホームが多い。この地域に障がい者が住んでいることを知ってもらう。
	事業の主な内容	①中区障連が主催する年に一度のバザー中心のイベント。 ②区と各連合自治会が行う「障がい者が参加する防災訓練」への参加。
	利用者	新本牧地区を中心とした中区住民
	最初に共有した危機感	中区の中でも特に本牧地区は障がい者が比較的多く暮らす地域であり、まず知り合うことが必要だということ。
	協働してここがよかった	①ここ5～6年で障がい者運動の流れが変わった。地域が理解してくれない、ではなく、理解してもらうためにはどうすればよいかを考えるようになってきた。 ②災害時に、黄色いバンダナは援助を求めている人、緑色のバンダナは援助できる人という取組を中区から始めた。
	地域特性	中区の中でも特に本牧地区は近隣に京浜工業地帯があり、石油タンクが林立している。大規模地震などが起きたときに爆発するのでは？という危機感を住民が共有している。またトラック等の交通量も多く大気汚染などの環境問題も気にしている。

■事例から学ぶ

●区社協としての役割は、財源確保の支援と信用保証、自治会町内会への根回し、区役所との調整が期待されている。

●関係性ができるまでは、直接障がい者団体からなじみのない区の部署や地縁組織、商店会などに連絡をするのは（残念ながら）難しい場合もある。つながるきっかけづくりは、区社会福祉協議会など支援機関の役割。

●地域ケアプラザは、身近な事務所機能や会議場所・ＰＲ拠点として、障がい者団体などと連携してイベントなどを行うことで、段取りや人手不足の支援、地域へのＰＲの役割を担える。

●区内すべてに通じる福祉的問題など（この場合障がい者の災害避難）については、問題の当事者を中心に、区役所各課（この場合、サービス課障害者支援担当・総務課・地域振興課）、区社協、区社協ボランティア連絡会などで検討委員会を立ち上げることにより、地縁組織とスムーズにつながりやすくなる。

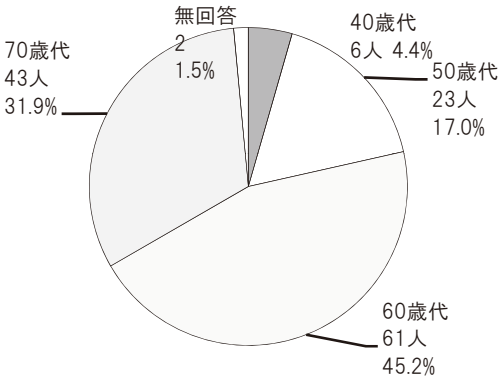
平成20年度　緑区社会福祉大会　第２部　「みんなですすめよう！みどりのわ・ささえ愛プラン」

アンケート集計結果

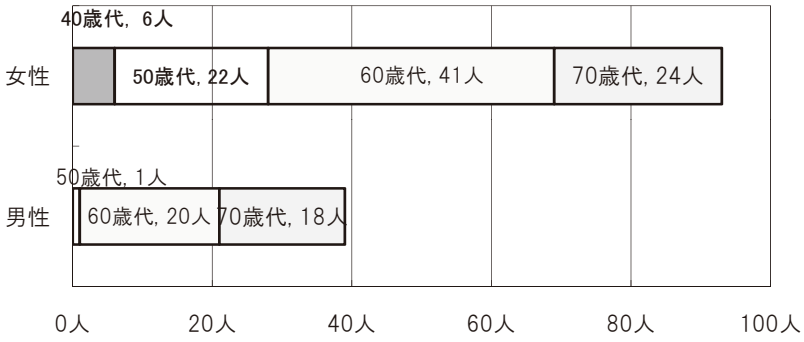
緑区社会福祉大会第2部へご参加いただいた方のうち、135名の方からアンケートに対する回答をいただきました。ご協力頂きました皆様、ありがとうございました。アンケートの集計結果を報告します。

1）アンケート回答者の年齢・性別内訳

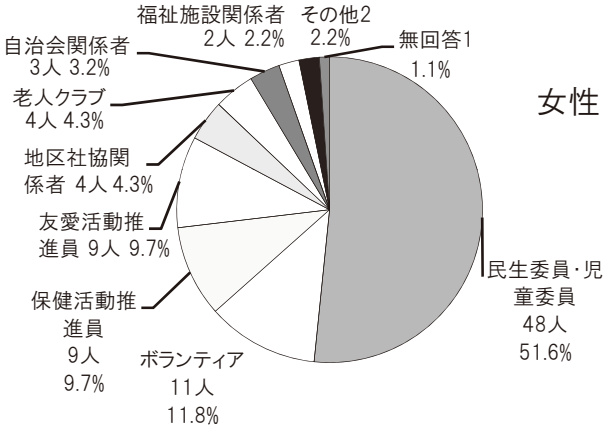
回答者の年齢(年代、回答数、割合)

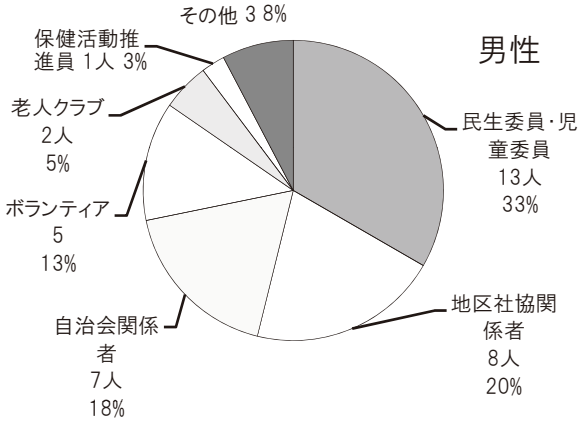


年齢別･性別　参加者数

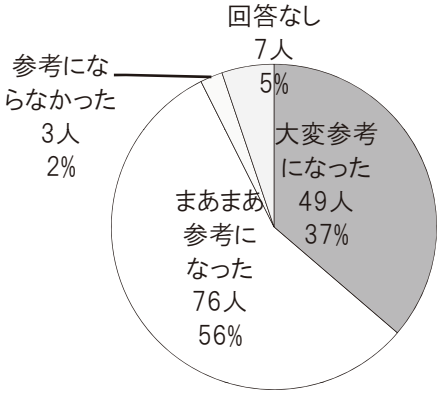


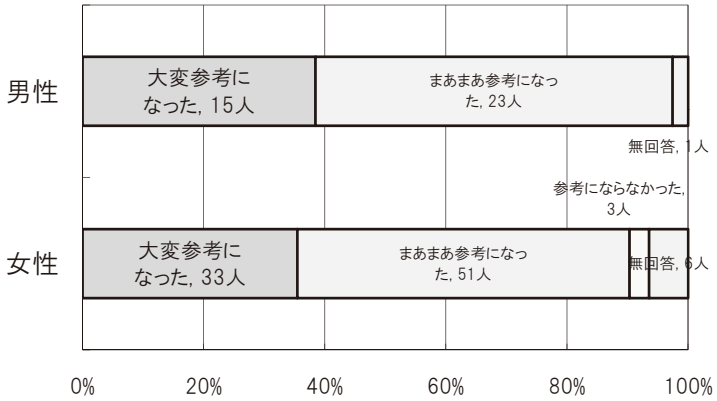
2）アンケート回答者の性別・所属等内訳





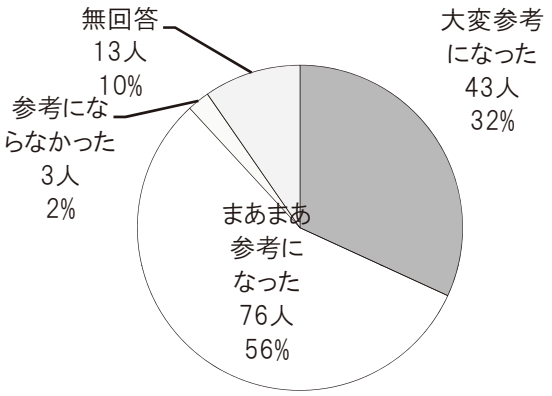
3）講演会「地域に新しい風をつくる～１０のヒント」の「事例紹介」はいかがでしたか。

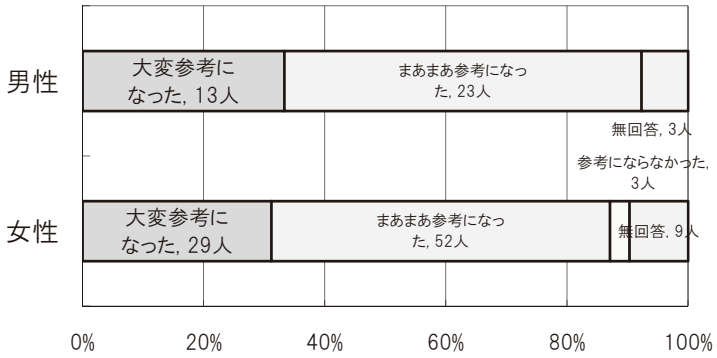




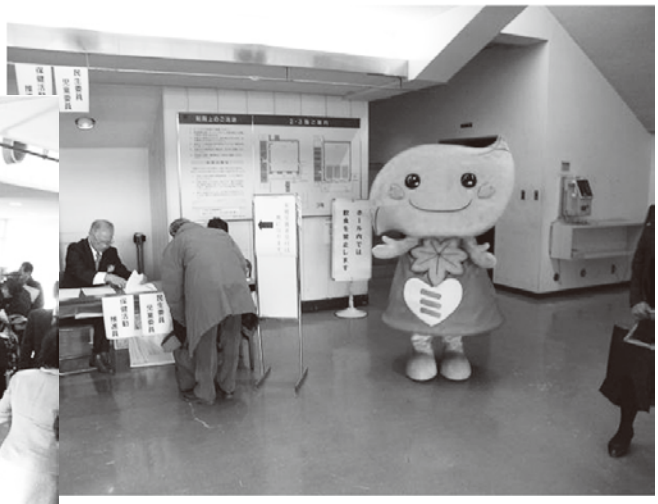
【コメント】
- 意識の問題であるので、トップの協力がないと話し合いまで進まない。
- 多くの事例があったので、なるほどというところがあった。
- 会場とのYES／NOクイズ等をいれ、事例もスクリーンで良く見えてよかった。
- 風をふかせていきたいです。
- 関係する地域では、多くの企画をしていて事例は新しく参考になる程ではない。
- 今日こられた方はあちこちお手伝いしている方が大半ですので。
- 具体的に紹介していただいたのでよかったです。
- 港南区、栄区などの声かけなど
- このような活動を始めて知りました。
- 今度、班長になったとき、是非参考にさせていただきたいと思いました。
- 財政（資金確保）の苦労があると思う。人のつながりが大切だが、その点の紹介もほしかった。
- 栄区湘南桂台地区の活動
- ささえ愛プランが伸びていくと良い地域になる、いいお話でした。
- 自治会と社協の関係がわからない
- 自治会のかかわり方の方法の違い、手本になることもあった。
- 趣味の会かサークル活動等の団体への働きかけが重要となる。
- 大変参考になり勉強になった。
- 大変ヒントになると思う
- 当地区と実情が違うので具体案が難しい。
- 中区で障がい者に理解を示す人が増えたとのこと、良かったです。
  みんなが障がい者を持っている世の中でだと思う私はひとごとでないから。
- 普段ばらばらに活動しているが、協働する難しさを感じていた。
- プロセスその他違っても我地域の活動は活発です。
- 本日の「地域の新しい風」は私の住んでいる地区では「充実した風」になっています。
  したがって本日のヒントや事例は日々いかされていることばかりでした。集合住宅地区なので活動はしやすいです。
- 私達、参加者は10年、20年、～委員をやっています。

4) 講演会「地域に新しい風をつくる～10のヒント」の「みんなと一緒に担い手について考える」はいかがでしたか。



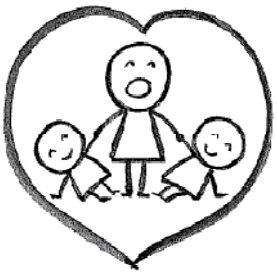


【コメント】
- YES、NOの札を出させるアイデアは良い。二人でしゃべるのは良いです。
- いろいろな考え方があり自分の率先にやりたい気になってきました。
- 感心する点が多々あったが、自分のところでとなると、すぐに参考とまでは行かない。
- グループ毎のつながりのきっかけをどうするか！？
- 誘う時の敷居を低くというのは、忘れていたことを思い出しよかった。
  沢山の方々に少しずつ自分のできるところをという形でかかわってもらうこと、大切ですね。
- 自分が関わっている団体にあてはめて、深く考えてみたいと思いました。
- 締めの言葉。外の人々へお願いすることが新たなつながりができる。
- 知らない間に活動に関わっていた！自然な流れで気がつくと大勢の人が参加していた、なんて、
  うれしく楽しいことでしょう。ちょっとこれから、引きずり込もうと思います。
- 他の団体の講座にわざわざ出かける人は、その団体に影響力をもつ人でないと意味がないです。
  しかし、その人は大抵忙しく「そんな暇ない」です。
- 男性の方々のボランティア活動への参加するキッカケを参考に、自分たち地域に広げたい。
- 地域ケアプラザ、地区センター、地区社協、連合自治会との情報交換の機会を定期的に開催すること。
- 地域に帰って皆さんで話し合いをしたい。
- 日頃、何となく気になっていたことについての内容でした。こんな切り込み方もあるのかと考えさせられた。
  思考を柔軟にということでしょうか。
- ボランティアグループであるが、誰でもといえない部分があり、その人の人格を見定めていくところもあるので、
  沢山参加してほしいが、その部分では難しい所もある。
- ボランティア等、高齢化してきたので、中間層（40歳～）の参加を求める方法を何か。
- ボランティアの内容を詳細に宣伝する。
- わざわざ人を入れる、賛成です。



5）次回、このような企画がありましたらどのような講演会、テーマを希望しますか？

【コメント】
- 1時からの催しは4時までだと長く感じられる。終了間際の集中のなさはこのせいだと思っています。
- お任せ
- 今日の講演はとても参考になりました。また、このような事例紹介＋提案のような講演をききたいです。
  ささえ愛プラン紹介の資料も入れてほしかったです。
- 講演内容は大変良かったですが、13時から16時までの時間が長いので短めにしてほしいです。
- 講師の方のチームワーク・キャラの違いが講演の力になってますね。説得力があります。
  活動からの自信からでしょうね。ありがとうございました。
- 今後も聞きたい
- 在宅での介護、見送りなどの話
- 支えあいカードの管理等
- ささえ愛プランはこれからもますます必要になると思い、これの延長も必要だと思います。
- 雑把でとらえ所も何となく雑然としていたので単一の講演会等を希望。又は事例の発表（当事者によるもの）
- 参加者にあったテーマを考えてください。
- 次回もこのように会話方式がよい。
- 自治会員を増やすための工夫
- 自治会会長選出方法（事例集）長いと表彰するのはいかがなものか。
  長いと不活性化、停滞化へつながる。自治会会則集（いろいろな）
- 自治会組織づくりのテーマ・ヒント
- 社会保障と福祉活動（ヨーロッパの社会保障等についてなど）
- 障がい者自立の為の取り組み方
- 心身に苦しみのある人の心理をより適切に知るのはどうしたらよいか。（よりよい支援をするために）
- すばらしい企画で実施した大会だったのに、なぜか盛り上がりを感じられなかったのは私だけか？
- 生活保護を支援してくれるNPO・団体・市区役所の方々の体験。
  このように、生活や収入に不安があふれている世界ではとくに。
  若い男性の方が地域の活動に関わってくれると「元気・明るい」イメージになるような気がします。
  独身・既婚・学生・職業に関係なくノーマライゼーションな活動が増えてほしいです。
- 精神障がいの方の支援方法など学びたい。
- 地域活動団体と行政・社協との連携について講演会を設定してください。
- 地域の人がどれだけこの活動を知っているのか疑問。広報活動をもっと積極的に行うといいと思います。
- つながりを広げる事例がもっとあると。
- どろくさい事例の発表
- 仲間の人たちと一緒に参加できるようなグループ会議ができることがほしい。
- 初めての参加でしたが心強く感じた。
- 班長、理事、役員等、もっと積極的に参加できるようにするには。
- ボランティア団体、それぞれの活動内容等の報告なども良いと思う（緑区内の珍しい話など）
- 緑区内の中学校の吹奏楽・コーラスもあるといいと思った。講演はどうしても眠くなってしまう。もう少し短くしてほしい
- やはり事例が一番よいと思います。
- 理念や理論ではなく、実践例を中心にしたもの（失敗の事例を含めて）
- 私は初めてですが、町内の皆さんに声をかけてこのような話を聞いていただいたら良いと思いました。



ご協力ありがとうございました。